学 位 論 文 審 査 の 要 旨

論 文 提 出 者	小 倉 英 稔
論 文 審 査 委 員	(主 査) 朝日大学歯学部教授 田 村 康 夫 (副 査) 朝日大学歯学部教授 式 守 道 夫 (副 査) 朝日大学歯学部教授 山 内 六 男

論 文 題 目

口唇口蓋裂児の口唇形成が吸啜機能に及ぼす効果

論文審査の要旨

口唇口蓋裂は，顎顔面領域において最も頻度の高い裂奇形の１つで，近年，各施設での治療成績の評価が求められているが，多くは形態評価が中心であり機能面においては構音評価にとどまっているのが現状である．そこで本論文は，口唇口蓋裂児における口唇形成術施行前後および術後３か月時における吸啜機能の変化について観察し，口唇形成が吸啜機能に及ぼす効果について検討することを目的としている．

被検児は，藤田保健衛生大学病院口唇口蓋裂センターに通院中の片側性完全唇顎口蓋裂を有する乳児を対象に，口唇形成術前（生後約１か月）と術後１週間および術後３か月の３回にわたり，吸啜運動時の吸啜圧変化および口腔周囲筋活動について計測している．また術後３か月群のコントロールとしては，同様の観察を行った健常乳児の母乳群と人工乳群の値を用いている．その他詳細な計測方法は内容要旨のとおりである．

その結果，糖液哺乳時の吸啜サイクル時間は，術後の方が術前に比べ有意に長くなり，さらに吸啜サイクル時間を陽圧相と陰圧相に分け検討すると，吸引や嚥下に関係する陰圧相時間が術後の方が有意に長くなっていたという．口唇形成術前後における口腔周囲筋活動では，健側 TM，患側 TM，OM において，術前に比べ術後の方が有意に増大し，総筋活動量も術後に有意に増大していた．口唇形成術後３か月では，糖液哺乳時の吸啜圧は術前に比べ大きくなっていたが，口腔周囲筋活動は術後３か月と術前および術後の筋活動量の間に差は認めなかったという．また口唇口蓋裂児の３か月後とコントロール群とを比較したところ，SM は３か月群が有意に小さい値を示し，また総筋活動量に占める SM の活動割合も有意に小さい値を示していた．

以上より，口唇形成は，吸啜サイクル時間の陰圧相時間が長くなり，口腔内の陰圧形成に有効であること，　しかし口唇口蓋裂児の SM の活動は口唇形成術前後とも小さく，舌の動きが健常乳児と比べ弱いことを示唆する結論を得ている．

審査委員は，本論文が片側性口唇口蓋裂児の吸啜運動の機能的特徴の一端を筋電図学的に明らかにし，また口唇形成術の有効性を機能的に明らかにしたことを高く評価し，学位(歯学)に値するものと判定した。